

中国語を母語とする日本語学習者の使役文の誤用分析 —作文コーパスをデータとして—

王 辰 寧

0. はじめに

ヴォイスの中心的な表現の一つである使役文は、日本語の文型において重要な位置を占めている。日本語教育において、使役文は通常、初級レベルの後半に扱われ始める文法項目であるが、日本語学習者が実際に使用する際には、様々なタイプの誤用が生じうる。

日本語における使役文をめぐる長い研究史があるが、言語習得の立場から使役文を扱う研究、特に、中国語を母語とする日本語学習者の使役文の誤用に関する研究は未だ十分に行なわれているとは言いがたい。そこで、本稿では、『YUK タグ付き中国語母語話者日本語学習者作文コーパス2015』Ver.5を用いて、中国語を母語とする日本語学習者の使役文の誤用を調査・分析し、誤用の数、そのパターンおよび誤用の原因の3点を明らかにしていく。

1. 先行研究のまとめと本研究の立場

1.1 使役文の意味分類

日本語記述文法研究会 (2009:210) によると、ヴォイスの中心的な表現の一つである使役文とは、「動詞の語幹に「-(s)ase-ru」という接辞を付加して、ある主体 (使役の主体) の働きかけや影響のもとでほかの主体 (動作の主体) が行う動作が成立するという形で事態を表現するものである」とされる。

通常、使役文の意味分類は、使役主体と動作主体の類型、動詞の自他などの構文上の特徴に基づいて行なわれてきている。例えば、森田 (2002) は、強い意志的行為から弱い因果関係までの、連続的な意味の違いを認めたとうえで、他動詞構文を形成する用法も加え、使役形式の表現的意味を次の10種類に分類している (同:195-197)。

- | | | |
|-------------|---------------|-------------|
| ①因果関係 (論理) | 小さな穴が堤防を決壊させた | |
| ②結果 (無作為) | やあ、待たせたね | |
| ③責任・手柄 | 息子を戦死させてしまった | 子供を大学に合格させた |
| ④誘発 (不随意) | 親を悲しませる不肖の息子 | |
| ⑤放置 (たまま) | ご飯を腐らせてしまった | |
| ⑥放任 (させておく) | 泣きたいだけ泣かせる | |
| ⑦許容 (ゆるし) | 褒美に海外旅行に行かせる | |

- ⑧指令（しむけ） 誘導尋問で犯人に吐かせる
- ⑨使役（やらせ） 病妻を無理に働かせる
- ⑩他動性（作為） 頭を働かせる

以上の分類から見ると、②～⑨は使役文の典型的な意味用法と言える。特に、⑨使役（やらせ）、⑧指令（しむけ）、⑦許容（ゆるし）、⑥放任（させておく）、④誘発（不随意）、③責任・手柄といった意味用法は、使役主体と動作主体の両方とも有情物の組み合わせで、日本語教育でもよく取りあげられている。

森田（2002）の分類の「①因果関係（論理）」に相当する使役文に関して、佐藤（1986）では、「因果関係の表現」を「人間の状態変化」と「現象間の関係」に分けている。また、佐藤（1990）では、前者に相当する使役文を、「使役の客体」（動作主体）が人間である場合と人間の部分・側面である場合との二つに分け、それぞれを「内的な原因」と「外的な原因」によりさらに二分している。なお、使役の客体が人間である場合、内的な原因に基づく因果関係を表す使役文において、主語（使役主体）は通常、人間の内部で進行する出来事、人間に属する性質、状態、動きを表す名詞とされる（例えば、「生活において自分が孤独である、という心持が彼女を泣かせた」）。外的な原因に基づく因果関係を表す使役文では、主語（使役主体）は通常、使役の客体である人間にとっては外的な出来事、外的な存在としての物を表す名詞となる（例えば、「両性の相剋するような家庭は彼を懲りさせた」）。さらに、「現象間の関係」に相当する「不況がつづけば、大企業は当然採用停止と操業短縮の手段になる。これは労働者の賃金格差を増大させる」のような使役文では、非情物の間に因果関係があることも指摘されている。

また、森田（2002）の分類の「⑩他動性（作為）」に相当する用法に関して、日本語記述文法研究会（2009:267-269）は、このような対応する他動詞をもたない自動詞から作る使役文を「他動的使役文」と呼び、例えば、「鈴木は足をすべらせて、転んだ」、「その役者は晩年になってついに才能を開花させた」、「首相は、思い切った政策で、経済を安定させた」のような例が挙げられている。主語（使役主体）の部分の変化を表す他動的使役文も多いとされる。

本稿では、使役文の全体像を踏まえて誤用の起こり方を検討するため、基本的には、森田（2002）の使役文の意味分類法に従い、①因果関係（論理）と⑩他動性（作為）に相当する使役文に関しては、佐藤（1986、1990）および日本語記述文法研究会（2009）の分析を参考にした分類を行なう（1.3節）。

1.2 使役文の習得・誤用に関する先行研究

馮（1994）は、日本語の使役文の学習を「使役マーカー」（「に」と「を」）の学習と「構文文法」（使役文の文法構造）の学習に分け、母語の干渉（負の転移）という視点から、質問紙調査を通して、中国語母語話者の日本語使役文の習得を困難にする要因を探っている。その結果、使役マーカーの学習エラーは学習年数（学習歴）と共に減少していくが、使役構文文法の学習エラーは学習年数が経てもそれほど減少しないことが明らかになっている。また、その減少しにくい原因の一つが母語の干渉にあることが指摘されている。

市川（1997）は、初級・中級前半程度の外国人日本語学習者（アメリカ、フランス、中国、タイ、メキシコなど）の作文、会話などにおける誤用を分析している。使役文の誤用例としては、述語動詞

の形態の誤り、使役と自他動詞の混同、助詞の誤用が見られる(同:154-161)。また、挙げられている誤用例を詳しく見ると、中国語を母語とする日本語学習者の誤用は特に、使役と自他動詞の混同、すなわち、他動詞か自動詞の代わりに、使役形にしなくてもいいところで使役形を使ってしまう誤用が多いことが分かる。

王(2008)は、中国人日本語学習者(日本語を専攻とする大学3、4年生、日本語専修学校上級コースの学生)の、作文における誤用を分析した研究であり、使役の誤用は、ヴォイス(使役、受身、自発、やりもらい)の誤用分析の節で扱われている。ヴォイスの誤用は、「過剰」(ヴォイス形式を使う必要がないのに使ってしまうケース)、「不足」(ヴォイス形式を使うべきなのに使わないケース)、「文の部分間の関係の混乱」(文の主語あるいは補語などの間の表現で混乱しているケース)、「態の混同」(ヴォイスの間での混同)という四つのケースにまとめられており、使役の誤用は、「過剰」、「不足」、「態の混同」に見られている。そのうち、「不足」の誤用の原因としては、自動詞を他動詞として使ってしま(特にサ変動詞)、文の整合性の問題といった、日本語のルールに関わる要因が挙げられている。

望月(2009)は、中国語を母語とする日本語学習者(在日留学生、上級レベル以上)による日本語作文コーパスをデータとして、中国語との対照の視点から、ヴォイス(動詞の自他、使役、受身、可能)の誤用分析を行っている。そのうち、使役の誤用に関しては、使役の付加(使う必要がないところで使う)による誤用が顕著であると指摘している。

以上のような従来の研究を見ると、中国語を母語とする日本語学習者の使役文では、①学習者の母語(中国語)の干渉によって、また、②目標言語(日本語)の構造そのものの理解が困難である(例えば、使役、自動詞、他動詞の三者の関係がわからない)ことによって、誤用が起こるとされていることが分かる。また、使役文の誤用のパターンとして、特に、使役形にしなくてもいいところで使役形を使ってしまう誤用が目立つことも分かる。

本稿では、幅広い学習者の多様な作文データを材料として、中国語を母語とする日本語学習者の使役文の誤用を体系的に分析することで、誤用のパターンを再確認するとともに、使役文の意味と誤用との関係についても見ていく。

1.3 本研究の目的と方法

本稿では、先行研究を踏まえ、『YUK タグ付き中国語母語話者日本語学習者作文コーパス2015』Ver.5を用いて、中国語を母語とする日本語学習者の使役文の誤用を調査・分析し、以下の3点を明らかにすることを目的とする。

- 1) 使役文の誤用はどれくらい起こるのか。
- 2) 具体的にどのようなパターンで使役文の誤用が起こるのか。
- 3) 使役文の誤用の原因は何か。

分析にあたり、従来の使役文の意味分類を踏まえて、次の〈表1〉のような使役文の意味分類を設定した。

〈表1〉使役文の意味分類

使役文の意味分類		例文 ¹⁾
①強制		●部下を無理に転任させた。
②指令		●社員に宣伝用のチラシを作らせた。
③責任		●その男は彼女を妊娠させた。
④手柄		●俺が家族を食べさせているんだ。
⑤誘発（生理現象・感情）		●彼女は冗談を言って男を笑わせた。
⑥許可・許容		●今月いっぱい会社を辞めさせてください。
⑦放任		●子供を遊びたいだけ遊ばせた。
⑧因果関係	主語の状態変化	●空腹は意欲を喪失させる。 ●足を滑らせて転んだ。 ●彼は「海外で働きたい」と夢を膨らませる。
	その他の参与者の状態変化	●その音楽は僕を混乱させた。 ●この道具がもの作りを進化させた。 ●子どもを自立させる。 ●日本は農地改革を成功させた。 ●明の太祖が科挙の制度を復活させた。 ●A社は新工場を完成させた。

〈表1〉のうち、①～⑦は典型的な使役文の意味用法と言える。使役主体（ガ格名詞）と動作主体（ヲ格名詞／ニ格名詞）のどちらも有情物に限られる。一方、⑧因果関係は、使役主体、動作主体が非情物でも成り立つ。

また、⑧因果関係は、従来の研究でなされてきた因果関係、他動詞化の用法を再構成したもので、再帰性を持つかどうかにより二分した。まず、再帰性を持つ使役文を「主語の状態変化」としてまとめた。これは、主語（使役主体）による働きかけや影響が、使役主体自身か、使役主体に所有されている部分を通して主語（使役主体）自身に及ぶという意味を表している。それに対して、使役主体の働きかけや影響により、主語以外の参与者の状態変化が起きるものを、再帰性を持たない使役文と見なす。

以下ではこの意味分類に従い、使役文の誤用の分析を進める。なお、本稿では、使役文における誤用のうち、「(サ)セル」の使用に関わる誤用を中心に調査・分析する。使役文における誤用には、格助詞の誤用（例えば、ニ使役とヲ使役の混用）も見られるが、その分析は別稿に譲る。

2. 中国語を母語とする日本語学習者の使役文の誤用調査

2.1 調査データ

本調査に用いたデータ、『YUKタグ付き中国語母語話者日本語学習者作文コーパス2015』Ver.5は、中国の40校の大学から収集した、日本語を専攻とする日本語学習者（学習歴：3ヶ月～10年）の作

文データ（日本語教育に携わっている日本語母語話者により、添削、正誤タグおよび研究タグ付与済み）である。文体は、感想文、卒業論文、修士論文などにわたって多種多様であり、テーマも言語学から文学、文化、経済など、幅広い。データの総量は、ファイル数:2,155、文字数:3,664,073、タグ数:54,828となっている。

2.2 調査の手順

調査の手順は、下記の通りである。

- ① コーパスから使役文の誤用例を検索し、調査対象とする「(サ)セル」の例を手作業で抽出する（「(サ)セル」と「ニ」「ヲ」のような格助詞の両方の誤用を含む文は、今回は対象から除外した）。
- ② 各誤用例に付与されている、「(サ)セル」の誤用箇所以外のタグを削除する。分析の便宜上、「(サ)セル」に関わる誤用以外の誤用箇所は、正用タグに従って、修正する²⁾。「(サ)セル」の誤用をそれぞれ1例ずつとして分析できるようにするため、一文に「(サ)セル」の誤用箇所が二つ以上ある場合、一箇所だけを残して、複数の例文に分割する。
- ③ 作文コーパスの各種タグに加えて、動詞の自他、誤用のパターン、使役主体および動作主体の意味的類型、使役文の意味分類などの情報を付与する。これにより作成した例文集を分析する。

3. 調査結果と考察

3.1 全体的な誤用の傾向

調査の結果、作文コーパスにおける使役文の「(サ)セル」の誤用には、「欠如」、「過剰」、「混同」、「動詞＋(サ)セルの誤り」という四つのパターン³⁾があることが明らかになった。具体的には、〈表2〉のようになる。

〈表2〉誤用のパターン

誤用のパターン	定義	誤用例 ⁴⁾
欠如	「(サ)セル」を使用すべきなのに使用していない。	卒論 (0035) / 学習歴4年: 資格の獲得で自分を<充実し→充実させ>ている。
過剰	「(サ)セル」を使用する必要がないのに使用している。	卒論 (0076) / 学習歴3年半: 連用形の後ろにつなげている、語気を<緩和させる→緩和する>。
混同	「(サ)セル」と受身・可能・自発の「(ラ)レル」、授受補助動詞「テ{アゲル/クレル/モラウ}」、使役受身「(サ)セラレル」、使役+授受「(サ)セテ{アゲル/クレル/モラウ}」の混同。	作文 (0035) / 学習歴1年: まず、宿題を<終われる→終わらせる>のがいちばん大事です。
動詞＋(サ)セルの誤り	「(サ)セル」だけでなく、前接する動詞まで含んだ誤用。	卒論 (0022) / 学習歴3年半: 近年、日本女性は流行を求めるとき、個人的な興味を<発展する→充実させる>ことが重視している。

四つのパターンのうち、「欠如」、「過剰」、「混同」は「(サ)セル」のみの誤用、「動詞+(サ)セルの誤り」は、動詞と「(サ)セル」の両方が誤用と判定されているタイプである。これらのパターン別の誤用例の分布は、〈表3〉の通りである。

〈表3〉誤用例の分類：誤用のパターン

誤用のパターン	誤用例数	
欠如	67	31.16%
過剰	60	27.91%
混同	37	17.21%
動詞+(サ)セルの誤り	51	23.72%
合計：	215	

使役文の「(サ)セル」の四つの誤用のパターンのうち、「欠如」のパターンで誤用が最も起こりやすく、その次は「過剰」、「動詞+(サ)セルの誤り」、「混同」という順になっていることが分かる。さらに、先の〈表1〉(1.3節)に示した使役文の意味分類から見た誤用例の分布は、〈表4〉の通りである。

〈表4〉誤用例の分類：使役文の意味

使役文の意味分類	誤用例数	
因果関係	169	78.60%
誘発	15	6.98%
許可・許容	9	4.19%
手柄	8	3.72%
強制	6	2.79%
指令	6	2.79%
責任	2	0.93%
放任	0	0.00%
合計：	215	

以上から、中国語を母語とする日本語学習者の「(サ)セル」の誤用は、「欠如」のパターンで一番起こりやすく、また、意味から見ると「因果関係」を表す使役文の割合がかなり高いことが分かる。以下では、この「欠如」のパターンの例を中心に、具体的な誤用の実態とその原因を考察していく。

3.2 「(サ)セル」の「欠如」に関する考察

使役文の誤用のうち、「(サ)セル」の「欠如」のパターンの誤用について、使役文の意味分類別に分布を示すと、〈表5〉のようになる。

〈表5〉「(サ)セル」の「欠如」の意味分類別分布

使役文の意味分類		誤用例数	
因果関係	主語の状態変化	17	88.06%
	その他の参加者の状態変化	42	
指令		3	4.48%
強制		2	2.99%
誘発		1	1.49%
許可・許容		1	1.49%
責任		1	1.49%
合計：		67	

〈表5〉から、「(サ)セル」の「欠如」の誤用は、「因果関係」を表す使役文に最も多いことが分かる。以下では、「因果関係」の使役文における「(サ)セル」の「欠如」の誤用、その他の意味用法における「(サ)セル」の「欠如」の誤用の順に、具体例を挙げながら考察していく。

3.2.1 「因果関係」の誤用1：漢語サ変動詞の誤用

まず、「因果関係」の使役文には、以下のような漢語サ変動詞の誤用例が目立つ。

- (1) 卒論 (0088) / 学習歴 3 年半：
再就職の主婦の行列の中で、仕事を通じて、自分の人生の価値を実現し、生活を<充実したい→充実させたい>と思う主婦が多くなった。
- (2) 卒論 (0088) / 学習歴 3 年半：
たくさんの暇がある主婦たちはこれらの手軽で簡単な仕事の中で自分を<満足し→満足させ>、余暇を充実させる。
- (3) 作文 (046) / 学習歴 1 年半：
人間は経済を発展<する→させる>ために、手段を選ばず自然から得をとりたい。
- (4) 卒論 (0083) / 学習歴 3 年半：
また世界的に見ても就業意欲が高いとされる高齢者層の雇用を<促進し→促進させ>、高齢者を生産年齢に組み入れる必要があるだろう。
- (5) 作文 (027) / 学習歴 1 年 3 ヶ月：
元気かどうかに関わらず、徹夜までして、計画を完成<し→させ>なければなりません。
- (6) 卒論 (0003) / 学習歴 3 年半：
矛盾を<減少し→減少させ>、交流を順調に進めるためには、両国は互いに相手の文化をよく理解し、尊重すること。

例 (1) ~ (6) のように、使役主体の働きかけや影響のもとで、主語 (使役主体) もしくはその他の参加者に状態変化が起こる事態を描写する文では、「充実する」、「満足する」、「発展する」、「促

進する」、「完成する」などのような漢語サ変動詞の誤用が多数見られた（59例のうち、延べ例数48例）。これらの例では、「漢語+サセル」の形を使うべきところで、「(サ)セル」が「欠如」し、「漢語+スル」の形になっている。このタイプの誤用の原因は、学習者の母語である中国語において、同形同義、もしくは類似した形で同義の動詞が存在することにあると考えられる。誤用が見られた具体的な漢語サ変動詞と、それに対応する中国語の動詞をリストの形で示すと、〈表6〉のようになる。

〈表6〉誤用例における漢語サ変動詞の日中対照

誤用例における漢語サ変動詞			対応する中国語 ⁵⁾	同形同義	類形同義	意味タイプ
動詞	自他	誤用例数				
充実する	自	6	充实 (chōngshí)	○		心理
満足する	自	5	满足 (mǎnzú)	○		心理
発展する	自	5	发展 (fāzhǎn)	○		変化の成り行き
促進する	他	3	促进 (cùjìn)	○		変化の成り行き
逆転する	自他	2	逆转 (nìzhuǎn) 扭转 (niǔzhuǎn)	○	○	変化の成り行き
減少する	自他	2	减少 (jiǎnshǎo)	○		変化の成り行き
増加する	自他	2	增加 (zēngjiā)	○		変化の成り行き
低下する	自	2	降低 (jiàngdī)		○	変化の成り行き
感動する	自	2	感动 (gǎndòng)	○		心理
完成する	自他	2	完成 (wánchéng) 建成 (jiànchéng)	○	○	出現
向上する	自	1	提高 (tígāo)		○	変化の成り行き
上昇する	自	1	上升 (shàngshēng)	○		変化の成り行き
昇格する	自他	1	提升 (tíshēng)		○	変化の成り行き
増大する	自他	1	增加 (zēngjiā)		○	変化の成り行き
発達する	自	1	发达 (fādá) 发展 (fāzhǎn)	○	○	変化の成り行き
普及する	自	1	普及 (pǔjí) 推广 (tuīguǎng)	○	○	変化の成り行き
形成する	他	1	形成 (xíngchéng)	○		出現
実現する	自他	1	实现 (shíxiàn)	○		出現
成立する	自	1	成立 (chénglì)	○		出現
登場する	自	1	登场 (dēngchǎng) 登上 (dēngshàng)	○	○	出現
一致する	自	1	一致 (yīzhì)	○		二項間の関係
対照する	他	1	对照 (duìzhào)	○		二項間の関係
対比する	他	1	对比 (duìbǐ) 对照 (duìzhào)	○	○	二項間の関係
調和する	自	1	调和 (tiáohé)	○		二項間の関係
適応する	自	1	适应 (shìyìng)	○		二項間の関係
命中する	自	1	命中 (mìngzhòng)	○		二項間の関係
融合する	自	1	融合 (rónghé)	○		二項間の関係

〈表6〉から、まず、中国語と同形同義の漢語サ変動詞の誤用が多いと言える。次に、「意味タイプ」の欄に示したように、これらの動詞には、意味的な共通性を見出すことができる。第一に、「充実／満足する」のような人の「心理」を表す動詞、第二に、「発展／促進する」のような物や事態の「変化の成り行き」を表す動詞、第三に、「完成／形成する」のような人や物の「出現」を表す動詞、第四に、「一致／対照する」のような相手や着点の項を要求し、人や物といった「二項間の関係」を表す動詞である。これらの動詞を含む文が中国語と日本語でどのような構文を形成するののかについて、以下の例(7)～(11)に『中日対訳コーパス第一版』に収録されている中国語の伝記、小説の例(中国語原文／日本語訳文)を示す。

- (7) Cóng qiūshōu qǐyì dào Jīnggāngshān dòuzhēng zài dào kāipì Gǎnnán hé Mǐnxī gémíng gēnjùdì, bùguǎn júshì zěnyàng xiè'è tā cóng bù fāngōng duì zhōuwéi huánjìng de xiànzhuàng hé láiyuán jìnxíng zhōumì de diào chá yánjiū nǔlì ànzhào bùduàn biànhuàzhe de shíjì qíngkuàng lái juédìng xíngdòng fāngzhēn bìngqiě shífēn zhùyì tōngguò shíjiàn de jiǎnyàn lái xiūzhèng huò chōngshí yuányǒu de xiǎngfǎ
 从秋收起义到井冈山斗争,再到开辟赣南和闽西革命根据地,不管局势怎样险恶,他从不放松对周围环境的现状和来源进行周密的调查研究,努力按照不断变化着的实际情况来决定行动方针,并且十分注意通过实践的检验来修正或**充实**原有的想法。

／秋收蜂起から井冈山の闘争、そして江西省南部・福建省西部革命根拠地の創設にいたるまで、情勢がどんなに険悪であろうとも、彼はこれまで周囲の環境の現状と由来について周密な調査研究を行うことをゆるがせにしたことはなかったし、たえず変化する実際情況にもとづいて行動方針を決定するよう努め、しかも実践の検証によって当初の考え方を修正もしくは**充実させる**ことにも十分な注意を払ってきた。 『毛泽东传／毛沢東伝』

- (8) Jiùdiàn lǐ de rén dàxiào le. A gèng déyì, érqiě wèile mǎnzú nà xiē shǎngjiànjiā qǐjiàn zài yònglì de yī nǐng cái fàngshǒu
 酒店里的人大笑了。阿Q更得意,而且为了**满足**那些赏鉴家起见,再用力的一拧,才放手。

／居酒屋の客たちが、どっと笑った。阿Qはいつそう得意になり、見物のかたがたを**満足させる**ために、もう一度ぎゅっとつねってから、ようやく手を放した。 『呐喊／吶喊』

- (9) Dì sān kào wǒmen zìjǐ de liǎng zhī shǒu zì lì-gēngshēng fāzhǎn shēngchǎn dàjiā gòngtóng kèfú kùnnán.
 第三靠我们自己的两只手,自力更生,发展生产,大家共同克服困难。

／第三は、我々自身の両手に頼り、自力更生して、生産を**発展させ**、みんなで一緒に困難を乗り越えること、である。 『毛泽东传／毛沢東伝』

- (10) Wǒ xiǎng jiěshì jiǎnfā de hǎochù nà dāngrán shì yǒu hěn duō de pìrú hé yú wèishēng jiéshěng shíjiān biànyú gōngzuò yǐjí jiǎnshǎo shèhuì shàng qǐshì nǚzǐ de xīnlǐ.
 我想解释剪发的的好处,那当然是有很多的,譬如合于卫生,节省时间,便于工作,以及**减少**社会上歧视女子的心理。

／わたし断髪長の長所を説明したいの。それはもちろんたくさんあるでしょうけど、たとえば衛生的なこと、時間の節約、仕事に便利なこと、また社会での女性偏見の心理を**減少させる**こと。

『家／家』

- (11) Tóngshí wánchéng le dàliàng de dǎng-zhōngyāng hé Běifāng jú jiāobàn de gōngzuò.
 同时,完成了大量的党中央和北方局交办的工工作。

／同時に、党中央と北方局が与えた大量の仕事**完成させた**。

『我的父亲邓小平／わが父・鄧小平(2)』

以上のように、中国語の例では、“充実(想法)”、“満足(赏鉴家)”、“发展(生産)”、“减少(歧视女子的心理)”、“完成(工工作)”のように、いずれも「他動詞(+賓語)」の構造をとる構文になっている。これに対応する日本語の構文は、「(考え方を)充実させる」、「(見物のかたがたを)満足させる」、「(生産を)発展させる」、「(女性偏見の心理を)減少させる」、「(仕事を)完成させる」のような、

「(目的語+ヲ+) 自動詞/自他両用動詞-(サ)セル」の形である⁶⁾。このような日本語の使役文における「(サ)セル」は、自動詞に対応する他動詞がないか、自他両用動詞または他動詞であってもその他動性を強化する場合に用いられるものであり、典型的な使役のような「強制」、「許可・許容」といった意味を持たない。ここで示した動詞群における「(サ)セル」の「欠如」の誤用は、学習者の母語(中国語)では元々使役の要素が使われず、かつ、意味的に「使役」のニュアンスを感じにくい「(サ)セル」の用法であるため、母語の感覚のまま、動詞のみを使ってしまうことで起こると考えられる。これは、学習者の母語である中国語の規則が負の転移(干渉)を起こしていると解釈できる。

3.2.2 「因果関係」の誤用2:再帰性を表す構文の誤用

「因果関係」の使役文において「(サ)セル」の「欠如」を起こしやすいと考えられる第二のパターンは、「動詞+(サ)セル」が再帰性を持つ場合である。

日本語記述文法研究会(2009:295)によると、一般的な再帰構文は、「能動主体による働きかけが、対象を通して主体自身に向けられる他動詞構文で、自動詞文に近い意味をもつ」とされる。再帰構文を構成する動詞には、働きかけが常に主体に向けられる再帰的他動詞(例12)と、ヲ格名詞の意味によって再帰的な用法を持つことがある動詞(例13)がある。例えば、下記のような例である(例文は『中日対訳コーパス第一版』に収録されている日本語の小説による)。

- (12) 彼は紺がすりの着物を着ながしにし、鳥打帽子をかぶっていた。 『友情』
 (13) 私は手を振り、駆け上った。 『野火』

本稿の「因果関係」の使役文においては、〈表5〉で「主語の状態変化」としてまとめた例(17例)がこれに該当する。これらの使役文は、使役主体による動作主体(使役主体自身かその部分)への働きかけや影響が、動作主体を通して使役主体自身に及ぶという意味を表している。具体的な誤用例は、次の例(14)～(18)の通りである。

- (14) 卒論(0093) / 学習歴3年半:
 踊り子は「私」の肩に触るほど顔をよせて真剣な表情をしながら、目をきらきら<かがやいて→かがやかせて>、一心に「私」の額を見つめ、またたき一つもしなかった。
- (15) 卒論(0079) / 学習歴3年半:
 日本人は心身を<リラックスして→リラックスさせて>お風呂に入る。
- (16) 作文(0693) / 学習歴2年:
 その時、心を<落ち着いて→落ち着かせて>真面目に刺繍しました。
- (17) 8級試験(0069) / φ:
 もうすぐ社会に出るので、自分自身を<充実し続ける→充実させていける>だろう。
- (18) 自己紹介(0088) / 学習歴1年半:
 部活に積極的に参加し、意気投合する友達を作り、大学の生活を<充実したい→充実させたい>です。

以上の例の動作主体（被使役者）は、「身体部位」もしくは「人間の内部・側面」を表す名詞であり、使役主体に所有されているという関係にある。これらの名詞に続く動詞は再帰的他動詞ではないが、ヲ格名詞の意味によって、「動詞＋（サ）セル」の形で、再帰的な用法を持つと言える。具体的には〈表7〉のようになる。

〈表7〉再帰性を持つ「主語の状態変化」を表す使役文の構成要素

動作主体（被使役者）		再帰的な用法を持つ動詞		
		動詞	自他	誤用例数
身体部位	目	かがやく	自	1
人間の内部・側面	自分（2例）、自分自身、生活（2例）、余暇	充実する	自	6
	虚栄心、空想、自分、欲望	満足する	自	4
	心身	リラックスする	自	1
	精神の境界	昇格する	自他	1
	縁	調和する	自	1
	心	落ち着く	自	1
	日本語のレベル	向上する	自	1
	各自の特性	発達する	自	1
合計：				17

〈表7〉の動詞のうち、「充実する」、「満足する」などの漢語サ変動詞の誤用は、3.2.1節で述べた母語の負の転移（干渉）の可能性もありうる。しかし、それ以外の動詞である外来語サ変動詞「リラックスする」⁷⁾や和語動詞「かがやく」などとの共通性として、上で指摘した再帰性を表す文の構成要素という点を挙げることができる。

ここで、一般的な再帰構文（a）、再帰性を表す使役構文の正用（b）と誤用（c）の構文的特徴を示すと、次のようになる。

- a. 一般的な再帰構文： 目的語＋ヲ＋他動詞
 b. 再帰性を表す使役構文（正用）： 目的語＋ヲ＋自／自他両用動詞－（サ）セル
 c. 再帰性を表す使役構文（誤用）： 目的語＋ヲ＋自／自他両用動詞－φ

このように、本来は自動詞もしくは自他両用動詞に「（サ）セル」を加えて再帰的な意味を表すべきところを、学習者は自動詞と他動詞を混同して、自動詞を他動詞として用いる、あるいは自他両用動詞を他動詞のまま用いる⁸⁾ことで、「（サ）セル」の「欠如」が生じたと考えることができる。

3.2.3 その他の誤用

学習者による「(サ)セル」の「欠如」の誤用として、ここまで述べた漢語サ変動詞、再帰性を表す使役文に見られるもの以外に、次のような例が見られる。

(19) 卒論 (0080) / 学習歴 3 年半 :

(28) の文は学生達が先生の家に遊びに来るときの電話であり、電話をもらった先生がせかされているような感じになり、「彼らを長い時間待たせてしまったのだろうか」と<思っている→思わせる>意味となる。

(20) 作文 (0041) / 学習歴 1 年半 :

そして、司会者は急に、前のお客さんを後ろの三行に移動させまして、後ろの椅子にくすわりました→すわらせました。

(21) 卒論 (0096) / 学習歴 3 年半 :

天皇が仏教を育て上げて仏陀を利用して万民を臣下として<従う→従わせる>ことができ、原始の宗教の信仰段階での日本の統治者も仏教が国家を鎮護し、幸福を祈り、災害から免れる、政敵を倒し、多くの現世利益を与えると考えた。

(22) 卒論 (0085) / 学習歴 3 年半 :

他の女性と気ままに付き合っても、彼女を一貫して内室に閉じ込め、節操をかたく<守り→守らせ>、好色者に乗じるべきチャンスを許さない。

(23) 修論 (0043) / 学習歴 6 年か 6 年以上 :

例えば、金属製のペンチで親指をはさむ、火で焼かれた鉄線で腕をやけどくする→させる。

以上の誤用例には、典型的な「指令」(例 20、21)、「強制」(例 22)、「責任」(例 23) のような意味を持つ使役文のほか、「因果関係」(その他の参加者の状態変化)を表す使役文(例 19)もある。これらの共通点は、複数の述語を含む複文であり、文全体の構造が複雑であるという点である。王(2008)の「文の整合性の問題」(1.2 節)はこのタイプに相当すると考えられる。

(19) では、「(28) の文」の働きかけ作用によって「先生」の「思う」という動作が引き起こされるが、間に「せかされる」という受身文が入るからか、「先生が」に対応した「思う」が述語として用いられており、「(サ)セル」が「欠如」している。(20) では、使役主体である「司会者」が動作主体「前のお客さん」に働きかけ、「移動する」という動作を引き起こしたところまでは使役文で描けているが、同じ働きかけ作用によって「すわる」という動作には「(サ)セル」を使っておらず、「欠如」を起こしている。

さらに、(21) では、「天皇」は、「育て上げる」、「利用する」の動作主でありかつ使役主体として、動作主体(「万民」)に働きかけ、「従う」という動作を引き起こすが、学習者はそのような文の描く事態と形式の整合性をうまく把握できておらず、使役主体としての働きかけが見落とされている。

(22)、(23) も、それぞれ「閉じ込める」、「はさむ」の次の動詞をそのまま使うことで、使役主体である「男」、「刑を施す人」自身が「節操を守る」、「腕をやけどする」の動作を行なったように読み取れてしまう。

以上のように、学習者は、複文において、前後の事態の働きかけ関係の整合性をうまく把握できな

い場合、「(サ)セル」の「欠如」というパターンの誤用を引き起こしやすいと言える。

4. おわりに

本稿では、『YUK タグ付き中国語母語話者日本語学習者作文コーパス2015』Ver.5を用いて、中国語を母語とする日本語学習者の使役文における「(サ)セル」の誤用を調査・分析し、以下のことを明らかにした。

- ①中国語を母語とする日本語学習者の「(サ)セル」の誤用は、「欠如」、「過剰」、「混同」、「動詞 + (サ)セルの誤り」という四つのパターンがある。
- ②「(サ)セル」の誤用は、「欠如」のパターンで最も起こりやすい。また、使役文の意味分類で見た場合、「因果関係」の意味を表す使役文の誤用が多い。
- ③「欠如」の誤用は、漢語サ変動詞や再帰性を持つ構文、および複文に多い、その原因として、それぞれ、母語の負の転移（干渉）、自他動詞の混同、不十分な事態把握が考えられる。

以上のように、中国語を母語とする日本語学習者の、使役文の誤用の実態（どのような誤用がどれくらい起こるか）を観察し、その原因を探ってきた。本稿で明らかにした誤用の実態は、使役文のどこが学習者にとって難しいポイントであるかを示唆するものであり、使役文に関して「何をどう教えるか」という日本語教育場面で直面する問題に一つの判断材料を提供するものと考えられる。

今後はさらに、「欠如」以外の「過剰」、「混同」、「動詞 + (サ)セルの誤り」といったパターンについて詳しく考察していく必要がある。

注

- 1) 例文はコーパスおよび新聞の実例をもとに筆者が作成したものだが、すべて日本語母語話者による添削済みである。

- 2) 例えば、作文コーパスにおける例：

経典は日本に<テンス・アスペクト／伝わった→伝わる><名詞／あと→と>、
研究タグ 誤用タグ 正用タグ 研究タグ 誤用タグ 正用タグ

日本の雕版印刷業の発展を<使役／促進した→促進させた>。 (卒論 (0029))

を、便宜上、次のように修正した。

経典は日本に伝わり、日本の雕版印刷業の発展を<使役／促進した→促進させた>。

- 3) 1.2節で言及した王 (2008) では、使役の誤用は「過剰」、「不足」、「態の混同」の三つのケースに見られたことが指摘されていたが、本稿では、この分類を参考にしながら、使役文の「(サ)セル」の誤用のパターンを四つにまとめた。
- 4) 例文には、「文体 (ファイル番号) / 学習歴」の形で情報を付した。情報が欠落している場合は、「φ」で示している。また、「(サ)セル」の誤用箇所の研究タグは省略している。
- 5) 『中日対訳コーパス第一版』に収録されている中国と日本の小説、政論、伝記などの本文とその訳文を確認してまとめた。

- 6) 「満足／満足させる」、「发展／発展させる」のような対応関係は、学習者の自動詞構文と他動詞構文における誤用の原因の一部として、王（2008:149）にも指摘が見られる。
- 7) 「リラックスする（させる）」の誤用は王（2008:132-135）にも指摘があるが、サ変動詞の自動詞を他動詞として使う誤用であるという分析にとどまっている。
- 8) 自他両用の漢語サ変動詞の再帰構文で「(サ)セル」が必要とされることは、山田（2014）に指摘がある。

言語資料

于康（2015）『YUK タグ付き中国語母語話者日本語学習者作文コーパス2015』Ver.5
 北京日本学研究センター（2003）『中日対訳コーパス第一版（CD-R1）』
 読売新聞（2013年7月19日～8月19日 全国版 全文、『ヨミダス歴史館』より検索）

参考文献

- 市川保子（1997）『日本語誤用例文小辞典』、凡人社
- 佐藤里美（1986）「使役構造の文—人間の人間に対するはたらきかけを表現するばあい—」、言語学研究会編『ことばの科学1』、pp.89-179、むぎ書房
- 佐藤里美（1990）「使役構造の文（2）—因果関係を表現するばあい—」、言語学研究会編『ことばの科学4』、pp.103-157、むぎ書房
- 日本語記述文法研究会（2009）『現代日本語文法2—第3部 格と構文・第4部 ヴォイス—』、くろしお出版
- 馮富栄（1994）「日本語使役文の学習過程における母語（中国語）の影響について」『教育心理学研究』42-3、pp.324-333、日本教育心理学会
- 望月圭子（2009）「中国語を母語とする上級日本語学習者によるヴォイスの誤用分析—中国語との対照から—」『東京外国語大学論集』78、pp.85-106、東京外国語大学
- 森田良行（2002）『日本語文法の発想』、ひつじ書房
- 山田勇人（2014）「日本語における再帰構文の他動性に関する一考察—自他同形漢語動詞の分析を通して—」『言語と文化』8、pp.77-85、京都外国語大学大学院外国語学研究所
- 王忻（2008）『中国日语学习者偏误分析（新版）』、外语教学与研究出版社

An Analysis of the Errors in Causative Sentences of Chinese Native Speakers Studying Japanese: Data from the Essay Corpus

Wang Chenning

This paper investigates the errors in causative sentences in Japanese produced by Chinese native speakers studying Japanese, using the 'YUK_Japanese essay corpus of Chinese native speakers studying Japanese with taggers 2015' Ver.5. In particular, this research focuses on errors involving '- (s)ase-ru'. Analysed are 1) the number of errors, 2) the patterns of errors and, 3) the causes of the errors.

The results from the survey and analysis are as follows. A) the 4 patterns of learners' errors can be described as 'deficiency', 'overuse', 'mixed with other expressions' and 'error in both verb and - (s)ase-ru'. B) the most common error category is that of 'deficiency'. C) one reason for the error of 'deficiency' is that of interference from the learners' native language (Chinese).

The data from this paper can be considered useful to the field of Japanese language teaching when teaching the causative sentence form.